

○地域貢献研究 T-2

研究課題 「茨城県の障害者スポーツ研究」

○研究代表者 医科学センター教授 和田野安良

○研究分担者 人間科学センター教授 岩井浩一

(5名) 看護学科教授 市村久美子

理学療法学科教授 水上昌文

作業療法学科講師 池田恭敏

医科学センター嘱託助手 長野志穂

○研究年度 平成18年度

(研究期間) 平成17年度～平成19年度(3年間)

1. 研究目的

障害者リハビリテーションの一環として始まった障害者スポーツはリハビリテーションとしての効果をあげる一方、障害者の社会参加として捉えられるようになり、より競技性が強くなっている。そして、各種大会も開かれているが、障害者が積極的にスポーツに参加するには、茨城県においても機会や種目、クラブ数、競技レベルにおいても不十分な状態である。この研究は茨城県における障害者スポーツの発展・普及に寄与することを目的に、茨城県内において障害者の障害程度、年齢、地域にあった障害者スポーツの普及、および、茨城県における障害者スポーツの競技力の向上を目的にしたものである。

2. 研究方法

この研究は3カ年計画であり、昨年度の平成17年度には、①中核となる組織である茨城県障害者スポーツ研究会の立ち上げ。そのため、茨城県内で障害者スポーツを研究、教育のテーマの一つとして取り組んでいる人10名で発起人会を作り、茨城県内で障害者と関わりを持つ、医師、看護師、理学療法士、作業療法士、養護学校教員、障害者スポーツ指導員、広域スポーツクラブ、などに広く声を掛けて会員を募った。②茨城県における障害者スポーツの種目別実施状況を全国の競技団体にアンケート調査を行い、茨城県内で障害者スポーツを行うための方法を調査した。

平成18年度(今年度)には①実際の茨城県における障害者スポーツの活動状況調査し、茨城県障害者スポーツのホームページ立ち上げる。②県内のリハビリテーション病院に働きかけて、障害者スポーツへ参加の働きかけを行う。③第二回の茨城県障害者スポーツ研究会を実施し、情報交換をおこなった。

平成19年度には、①各競技別種目のスポーツ活動支援、②各障害者スポーツ実践者の運動能力・体力測定、各競技別スポーツ技術向上のための支援などを予定している。

3. 研究結果

県内で行われている障害者スポーツは、サッカー(知的、身障)と(視覚)の2種、卓球も(視覚、聴覚)と(身障)の2種、水泳は(障害児)2種と(身障)1種、テニスが(視覚)と(身障)2種、車椅子バスケットが(身障)1種、アーチェリーと陸上(身障)の各1種、柔道(視覚)の1種であった。

昨年立ち上げた第一回茨城県障害者スポーツ研究会を発展した第二回茨城県障害者スポーツ研究会を茨城県の後援を得て開催した。今回はアジアパラリンピック委員会医学委員長陶山哲夫教授の講演を「障害者スポーツとパラリンピック参加条件」の演題で行った。昼には各障害者スポーツの情報交換会を行った。研究会には58名の参加を得た。その他、6月24日には医療体育研究会と合同で、養護学校、老健、特老の職員を対象とした障害者スポーツセミナーを開催した。また、医療大学内に学生を中心とした車椅子バスケットボール部を創設し、県南地区の障害者、リハビリテーション中の患者さんとも合同で練習を行った。養護学校、小学校などにも出向き、車椅子バスケットボールのデモンストレーションを行った。なお、医療大学車椅子バスケットボール部は第5回の全国車椅子バスケットボール大学選手権大会で準優勝した。

4. 考察(結論)

障害者がスポーツを行いたい欲求があり、障害者スポーツに関心があつて積極的にサポートしていきたい人が多くおり、また障害者スポーツ指導員の有資格者もたくさんいる中で、障害者スポーツが茨城県において低調なのは、それらを結びつける組織と情報、障害者スポーツを行える施設の確保が大きな問題であることが分かった。茨城県内の障害者スポーツ調査結果のホームページは現在作成中である。

5. 成果の発表(学会・論文等、予定を含む)

研究成果を第16回日本障害者スポーツ学会(大分)で、「茨城県障害者スポーツ研究会の設立」の演題で報告した。原稿を日本障害者スポーツ学会誌に投稿し、近々発刊予定である。